

映像制作技法・映像制作実習

テレビドラマ演出分析のエッセンス

カット割り……映像の基本構成要素はカット

多くの人は、映画やドラマをひとつながりの物語として見えています。しかし実際は、バラバラに撮影されたカットがパズルのように並べられているだけであり、それが、つながっているように見えているにすぎません。本日の講義では、カット編集を中心にしてドラマ演出を分析してみます。ひとつひとつのカット(ドラマの部品)を意識しながらドラマを見ると、作り手の意図や苦労が想像できるようになります。

最近「テラスハウス」のように、どこまでがフィクションでどこからがドキュメンタリーなのかが、よくわからない作品もありますが、「この映像は台本なしで撮影可能か。1台のカメラで撮影可能か」などと考える習慣が身につくようになれば、映像作品の見方が飛躍的に変わります。

●『ランチの女王』(2002年) 第8話オープニング(45秒) 演出：川村泰祐

森田剛の乱闘シーン(1カム撮影)。全部で5分間のシーンで約170カット。1カットあたり、平均1.76秒。これの冒頭部分の抜粋。このシーンを撮影するのに、まる1日かかっていると思われます。

●『3年B組金八先生』(2002年) 第6シリーズ第18話ラスト(45秒) 演出：福澤克雄

上戸彩の乱闘シーン(ほぼマルチ撮影)。全3分間で約95カット。1カットあたり、平均1.89秒。そこから45秒ほどを抜粋。お芝居重視の演出をすると手の込んだカメラワークはできない。

◆1カム撮影——カメラワーク重視 芝居が断片化される。近年は、2カメの場合も多い。

◆マルチ撮影(スタジオ)——芝居のライブ感を重視 カメラワーク(アングル)が制約される

近年は、カメラのデジタル化・小型化が進んだため、屋外ロケでもマルチカメラで撮影できるようになっています。小型の隠しカメラなら、アングルの制約もなくなります。

●『伝説の教師』（2000年）第7話（2分10秒） 演出：羽住英一郎

ここからは、脚本の内容とカット割りの関係に着目して話を進めます。カット割りは、野球におけるピッチャーの配球に似ています。演出家は、決めのカット（決め球）が強烈に見えるように、各カットを配列します。このシーンの決めのカットは米花剛史のアップ。米花くんを極力映さないようにカットを配列してあって、決めシーンで彼のアップがド〜ンと入るので、強いインパクトが生まれます。

このシーンでは、いきなり決めのカットが入った後、ゆっくりズームインして、決めのカットが再現されます。最初のカットが視聴者をびっくりさせるのに対し、2度目のズームインからのカットは、感動をじわじわ盛り上げる効果を持っています。このように、決めのカットを2度入れるというのも、演出上のテクニックです。

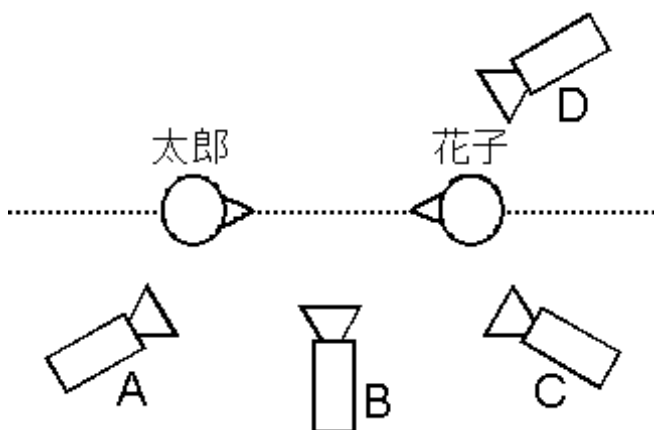
なお、この作品は羽住英一郎さんが演出家デビューした頃の作品の一つです。羽住さんはその後、映画監督として『海猿』シリーズや『暗殺教室』などを手掛けています。

●『弁護士のくず』（2006年）第9話（4分半） 演出：森嶋正也

喫茶店で、岡本麗が離婚届に印を押そうとすると映画『追憶』の主題歌が店内に流れる。カット割りの構造は上の『伝説の教師』と同じ。トヨエツ弁護士が『追憶』の有名なセリフを口にするところで決めのカット（望遠レンズ）。どんな決めのカットが出てくるのか予想しながら見てください。

このシーンは、(1)決めのカットが入る (2)決めのセリフが出てくる (3)音楽が盛り上がる (4)決めのセリフが繰り返される ——という4段構成になっています。

なお、このシーンの決めのカットは「イマジナリーライン」を越えています。



●イマジナリーライン

カメラA、B、Cで撮影したショットの後に、カメラDで撮ったショットを並べると、視聴者は、太郎と花子の位置関係がわからなくなってしまう。

よって、太郎と花子を結んだイマジナリーラインを越えてはいけない、というのがカメラ撮影、映像編集の基本原則になっている。超える場合は、視聴者を混乱させないための配慮が必要になるが、意図的に無視する場合もある。

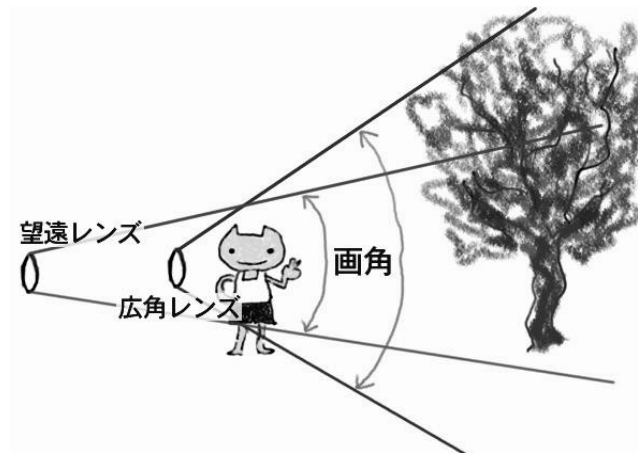
〔画像出典〕 能動ドットコム http://www.nowdo.com/tech_eizo/j_cam_word_yougo.htm

（補論）台本の解釈について 『高校生レストラン』（2011）第1話（演出：吉野洋）を例に

ドラマを見ていると、「このシーンのカット割りは、そうじゃないだろう」と感じる場合があります。『高校生レストラン』を見た時がそうでした。神木隆之介と川島海荷が、教師（松岡昌宏）の第一印象を語り合うシーンがあったのですが、2人の恋愛感情を示唆するセリフに重点を置いたカット割りになっていました。しかし、私は、このシーンで重要なのは恋愛ではなく、「今日来た先生は本物の匂いがする」とか「俺はあの先生についていくつもりや」というセリフだと感じたので違和感をおぼえました。

もちろん、この演出が間違っているというわけではありません。台本の解釈は人によって違いがあるということです。特に、脚本家と演出家の間では、この種の問題が深刻な問題に発展することがあります。いわゆる相性の良し悪しというのも、こういうところで決まります。

カメラワークの基礎の基礎（望遠と広角）



【出典】 <http://ammo.jp/weekly/koh/0208/koh020821.html>



【出典】 <http://a100.blog.so-net.ne.jp/2006-08-13>



【出典】『最高の人生の終り方～エンディングプランナー～』第6話(2012年)演出・川嶋龍太郎

| | 望遠レンズ | 広角レンズ |
|----|---|---|
| 意味 | ズームインの状態。画角が狭い。狭角レンズ | ズームアウトの状態。画角が広い。魚眼レンズ |
| 特徴 | 被写界深度が浅い(背景や前景がボケる) 手振れが目立つ 圧縮効果が働いて前後の距離感がなくなる | 被写界深度が深い(背景や前景がボケにくい) 手振れが目立ちにくい。手持ち撮影に便利 人間の生身の目に近い見え方 |
| 用途 | シリアスなシーン。内面描写。 ホットで情熱的・主観的な描写。 | コミカルなシーン。臨場感や空間の広さ(狭さ)を強調したいとき。クールで客観的な描写。 |

今期の連続ドラマから

『コンフィデンスマンJP』 第1・5話(演出:田中亮)、第4話(演出:金井紘)

●第4話、佐野史郎の後ろを伊吹吾朗が通り過ぎるシーン (17秒)

映画村の食堂。佐野史郎の後ろを通り過ぎる伊吹吾朗に注目してください。カットが切り替わると、伊吹吾朗が再度、後ろを通り過ぎていきます。カット編集上の不備ですが、ドラマを注意深く見ているとよくあります。バラバラに撮影されたカットを並べるのが、ドラマ制作の基本だからです。

●エキストラや美術にお金がかかっていそうなシーン (1:54)

このドラマは1話完結なので、毎回、ロケーションやセットが違っているが、カジノ、空港、映画撮影所など、エキストラの多いシーンが多い。1人1日1万で計算するとかなりの額になります。

ここでは、第1話からカジノ、キャビンアテンダント研修、第4話から京都の撮影所のシーンを見られます。キャビンアテンダント研修のシーンは、エキストラは10人程度ですが、わずか数秒のシーンであることに着目してください。このドラマでは、わずか数秒のシーンなのに、セットやエキストラを手配しているケースがやたら多いです。

●第1話、長澤まさみにハニートラップは無理だというシーン (1:46)

長澤まさみと東出昌大のお芝居。このドラマは、コミカルな会話・芝居が多いのですが、評価が分かれる部分でもあります。基本的にはお芝居優先の演出で、それを効果音などで補強しています。このシーンでは、最後の部分のみ、カメラワークでインパクトを加えています。

●第5話、オペをする長澤に東出がツッコミを入れる (0:55)

このシーンは、漫才におけるボケとツッコミと同じです。ツッコミを入れるタイミングが重要になりますが、生の漫才と違ってドラマの場合、カット編集によって、ツッコミのリズム感やインパクトを強めることが可能になります。

●第4話、業界人が集まるスナックで、佐野史郎に出資を求める (2:00)

お芝居をパターン化して、それを3回繰り返しています。繰り返すごとに、お芝居が大きくなっていきます。パターンされた芝居(演出)を数回繰り返すというのは、コメディ演出の定番。

『おっさんずラブ』 単発版(演出:瑠東東一郎)、第2話(山本大輔)、第3話(Yuki Saito)

●吉田鋼太郎と林遣都(単発版は落合モトキ)が言い合いになるシーン (1:58, 1:36)

このドラマは、2016末に単発ドラマで放映されているのですが、現時点では、単発版の方が密度が高かったように感じます。このシーンも、単発ドラマ版では、カット編集や効果音を駆使して、手の込んだ演出になっていましたが、連ドラは、お芝居中心のシンプルな演出で、どこか物足りないです。ただし、田中圭の演技は(このシーンに限らず)単発版よりもレベルアップしていると感じます。

●第3話ラスト、君の名は…… (1:00)

第3話を演出したYuki Saitoさんは、1・2話に比べると、手の込んだ演出をしていたように思いま

す。特に出色だったのはラストシーンで、オカルト風の演出で強烈なインパクトを残しました。お芝居中心の笑いとは違う、映像演出によって作り出される笑いを味わうことができます。

『半分、青い。』 第24・25話（演出：土井祥平）

●挨拶した佐藤健にトヨエツ（秋風羽織）が「なぜ君が名乗るんだ」と言う（0:24 , 0:22）

第24話（土曜日）のラストシーンは、第25話の冒頭で再登場しますが、BGM、カット割り、会話の間が微妙に違っていています。同一の撮影素材でも、編集によって印象が違ってくる場所に注目してください。完成度が高いのは25話の方だと思えますが、24話は、次週予告に続くラストシーンなので、間を強調するような演出はしづらかったのかもしれない。

●第25話、秋風羽織との会話「この人バカですか？」「タジオ！」（2:11）

とても面白いシーンですが、お芝居中心で、手の込んだ演出はしていません。永野芽郁、佐藤健、トヨエツの3人が、それぞれトーンの違う芝居をしているので、その温度差から生じる面白さを視聴者に伝えることを主眼としているようです。音楽や効果音も控えめですが、カラスの鳴く声をさりげなく使っています。お芝居中心という点では「コンフィデンスマン」と同じような演出といえますが、長澤・東出らの大声の芝居とは、かなりテイストが違います。

『花のち晴れ』 第1～3話（演出：石井康晴）

●第1話、体育館のような部屋で食事をしているシーン（1:12）

平野紫耀らが演じている神楽木家は超セレブという設定ですが、他のドラマに出てくる豪邸と差別化したかったのか、神楽木邸は王宮のような建物になっています。体育館のようなところで食事をしている光景はかなり異様ですが、撮影が大変なのか第2話以降は登場しません。

●第3話、杉咲花が「庶民狩り」されているシーン（1:18）

望遠レンズと広角レンズの使い分けがわかるシーン。平野紫耀（神楽木晴）が人込みを掻き分けていくカットは望遠レンズ。杉咲花（江戸川音）を助けようとして中川大志（馳天馬）が格闘しているカットは広角レンズ。その様子を見て呆然としている平野紫耀のアップは望遠レンズ。望遠レンズは内面描写のカットによく使われる。

●第2話終盤、木南晴夏のアパートで（庶民の？）料理を食べるシーン（3:32 , 0:07）

第2話のラスト10分くらいは、音と晴が初めて心を通い合わせる、とても重要なシーン。演出にも力が入っていました。杉咲花が野菜炒めやタコさんウインナーを作り、その様子を平野紫耀が見ているのですが、お芝居やカット割りに並みならぬ工夫の跡が感じられます。特に、ニンジンを切っている横で平野紫耀が「うわうわうわっ……」と声を上げているカットは、なかなか思いつかない秀逸なアイデアだと思います。

●上記のシーンに続く、帰り道でのシリアスな会話（3:44 , 1:00）

上記のシーンの末尾で、宇多田ヒカルの挿入歌「初恋」が流れ、2人の様子を見る木南晴夏の意味深な表情を挟んで、2人の帰り道のシーンになります。シーン前半は手の込んだカメラワークになっていて、その後続くシリアスな会話を予感させます。後半は、表情アップの切り替えしのみですが、

注目してほしい点が3つあります。

(1) 「完璧にならなくてもいい」の後で、宇多田ヒカル「初恋」が、ジャンと軽くブレイクする。

(2) 「泥だらけの野菜も洗って丁寧に料理すれば、美味しい野菜炒めになる」と言っている杉咲花のアップでは、カメラがゆっくりズームインしている。それを聞いて言葉を失う平野紫耀のアップも微妙にズームインしている。ゆっくりズームインは、感情の高まりを表現する定番の手法。

(3) 無言が続いた後、平野紫耀が顔を背けて「お前も飯はうめえ」と返す。

——アパートのシーンでは、平野紫耀がボケて、それを見た杉咲花が心を開くのに対して、帰り道のシーンでは、杉咲花が積極的に話しかけて、その言葉に平野紫耀が揺れる……という構成になっています。宇多田ヒカル「初恋」は、毎週一番シリアスなシーンで流れます。

『やけに弁の立つ弁護士が学校でほえる』第1・2話（演出：柳川強）

●第1話、職員室で神木隆之介と田辺誠一が対立するシーン

●第1話、職員室で神木がモンスターペアレンツと対立するシーン（3:11）

どちらも職員室内の気まずい空気感を強調する演出になっています。後者は、芝居（会話）が終わった後の時間を長めに撮る演出法で、芝居の余韻や登場人物の内面を強調したい時などに使われます。

●第2話ラスト、体育館で生徒が事故を起こすシーン（1:06）

体育館で神木&田辺が議論していますが、周囲の状況音（部活をしている生徒の音声）はほとんど聞こえません。そして、事故が起こった瞬間にその音が大きな音で入ります。

『ブラックペアン』第1話（演出：福澤克雄）、第2話（田中健太）、第3話（渡瀬暁彦）

●第1話冒頭、竹内涼真の目のアップでスタートする（1:03）

●第2話、二宮和也と竹内涼真の好対照な表情が並ぶカット（1:03）

第1話の冒頭は竹内涼真の目のアップでスタートし、主役の二宮和也は12分くらい登場しません。その後の出番も竹内涼真の方が多いため、実質的な主役は竹内涼真だと考えることも可能です。このドラマの場合、視聴者が共感しづらい登場人物が多いので、制作サイドとしては、竹内涼真に感情移入しながら見てほしいという演出意図があるのかもしれませんが。

後者は、太々しい二宮和也の表情と、オロオロと泣き崩れている竹内涼真の表情が、2つ並んでいて印象的です。と同時に、竹内涼真の顔が画面の中央になっているところにも注目してください。

●第3話、二宮和也と小泉孝太郎の同時オペ（0:31）

二宮・小泉を同一のカメラワークで撮って並べている場面が、3回あります。

2つのオペ映像が交互に出てくるので、見ていて、どっちがどっちなのかわからなくなりますが、演出家としては、緊迫感が伝わればわからなくてもいいと考えているのかもしれませんが。なお、演出の渡瀬暁彦は、昨年亡くなった俳優の渡瀬恒彦の長男。

『ヘッドハンター』第2話（演出：星護）

●第2話から、独特の色使いがわかるシーンをダイジェスト（5:09）

このドラマの特徴は色使い。ほとんどのシーンで、色彩感が1つの色（モノトーン）に統一されて

います。多いのは茶色のシーンで、机や壁などが茶色で統一されています。会社内のシーンでは白に統一されているシーンも多いです。

第2話の終盤では、茶色の画面に青い水槽が出てくるシーンがありますが、どうしてだろうと思って見ていると、「なるほど」と納得できる展開になります。色使いに着目して見ていないと、この演出には気が付きません。

星護は共同テレビの演出家で、90年代に個性的な演出で、その後のドラマ演出に大きな影響を与えた人。『古畑任三郎』（1995年）の演出スタイルも星護がチーフ演出で作り上げましたが、第2シリーズ以降は参加していません。

『シグナル 長期未解決事件捜査班』第1・2話（演出：^{うちかたあきら}内片輝）

●第1話から、青い画面の中で赤を印象的に使っているカット（0:36）

刑事ドラマ、サスペンス、ホラーでは、青（緑を含む）を基調とした映像が多いのですが、このドラマ（1～2話）では、青を基調とした画面の中で赤が印象的に使われています。犯人や被害者が赤い服を着ています。パトカーなどの赤色灯も重要なアイテムです。

●シーン切り替え時に入る赤いギミック（0:30）

回想シーンの映像から現在の映像に切り替わるときなどに、赤いギミック映像が入ることが多いので、そのいくつかを、第1～2話からピックアップしてみました。

●第2話から、無線機から赤～黄色の光が出ているシーン（0:38）

坂口健太郎と北村一輝が無線機で話すシーンでは、無線機から赤～黄色の光が出ているので、画面上のワンポイントとなっています。ただし、原作の韓国ドラマがどうなっているのかは、見ていないのでわかりません。

●照明に力が入っている夜間ロケのシーン（0:38）

夜間ロケでは大規模な照明を導入しないと、映像が貧弱になるが、このドラマ（1～2話）では、かなり照明に力を入れている。スモークを使っているシーンもある。

●第1話ラスト、夜の警察庁舎の前で犯人（長谷川京子）を確保（1:23）

(1)夜間ロケでの大規模照明、(2)青い画面と赤の対比、(3)雨（光る路面など）、(4)大量のエキストラ、などを駆使して作り上げられた、スタイリッシュで印象的なラストシーンです。

車のワイパーを使った面白いカットがあったので、それもオマケでつけておきます。

『未解決の女 警視庁文書捜査官』第1話（演出：田村直己）

●地下2階にある特命捜査対策室第6系の照明（2:20）

第1話によると地下2階にある第6系の部屋には、なぜだか明かり窓が付いていて、蛍光灯の青い光と明かり窓の黄色い光（電球色）がミックスされた空間になっています。重要なセリフのところでは、その人物の顔に黄色い光が当たっていることが多いようです。地下なのに明かり窓があるという（不自然な）設定は、演出上どうしても必要だったのだと思われます。

ドラマ全体の画面も青が基調になっていて、犯人の自白などの人間臭いシーンでは、黄色い光が使用されています。「ヘッドハンター」や「シグナル」との比較で言えば、1つの画面の中で青と黄色が同時に使われているところが、このドラマの特徴です。

また、鈴木京香は黒い服を着ているので、青暗い地下の部屋を背景にして、黄色い光が当たっている顔だけが浮き上がって見えるような映像になっています。

『Missデビル 人事の悪魔・椿眞子』第1～3話(演出:佐久間紀佳)

●第2～3話から、椿眞子の部屋の照明(1:03)

椿眞子の部屋が何階にあるのかわかりませんが、地下室のような雰囲気でも明かり窓が付いています。『未解決の女』と同じです。ただ、内装はメタリックな感じで、色使いも『未解決の女』とは違います。雷の光が入る第2話のアイデアなどは、今後、『未解決の女』でパクられるかもしれません。

●第1話から、BGMなどの音声が突然切れて次のシーンに切り替わる(1:12)

第1話では、不吉な印象を高めるために、BGMなどの音声を不自然なタイミングで断ち切って、次のシーンに移行する演出が何度も登場します。冒頭20分だけでも6～7回ほどありますが、その中からいくつかを見てください。第2話以降でも登場しますが、特に第1話では重要でした。

『モンテ・クリスト伯 -華麗なる復讐-』第1～3話(演出:西谷弘)

●第1話冒頭、視聴者に疑問を持たせる、ホームビデオ(風?)の映像。(3:05)

第1話の冒頭は約40秒の長回し。椰子の木を見上げるアングルからスタートして、玄関から出てくる山本美月を捕らえ、彼女が自転車で海沿いの道路をさっそうと走っていく姿を、1ショットで(途中でカットすることなく)映し続けます。カメラも自転車と同じスピードで移動・並走しています。よく見ると、山本美月はカメラに向かって「行ってきます」と話しかけたり、手を振ったりしています。画面の縦横比も4対3(昔のテレビサイズ)で、ワイド画面の左右が黒くなっています。

約40秒で長回しのショットが終わり、その後は、漁港に着いた彼女が、岸で寝ているディーンフジオカに話しかけるシーンになります。彼は山本美月にプロポーズし、結婚指輪を指につける山本美月の手元のアップなども映し出されます。そして、結婚承諾が決まったところでKANの「愛は勝つ」が流れ、「暖(ぬ)すみれ 結婚おめでとう!」の文字が画面に出てきます。

この時点で、これまでの一連の映像が、ドラマの登場人物によって撮影されたホームビデオだったことが明らかになるわけです。しかし、冒頭の長回しにしろ、カメラ割り(手元のアップなど)にしろ、およそ素人が撮影した映像とは思えない完成度です。また、山本美月はプロポーズを撮られているの知らなかったみたいで、このビデオを撮影したと思われる大倉忠義は「お前を驚かすのにどんなに大変だったか」というセリフを口にしていきます。しかし、彼女に内緒の状況で彼女の手元をアップで撮ることは可能だろうか、という疑問も残ります。

ようするに、第1話の冒頭は視聴者が混乱するような要素が満載であり、むしろ、それを意図して演出されたシーンだと考えることができます。ドラマの冒頭で視聴者に「なんだろう?」と疑問を持たせて、ドラマの世界に引っ張り込む——というのは、映像制作の技法のひとつです。

●第2話冒頭の高杉真宙、第3話冒頭の桜井ユキ・鎌田恵怜奈のシーン(計1分)

冒頭で視聴者に疑問を持たせるという手法は、第2話、第3話でも繰り返されています。高杉真宙は

第1話に登場していないので、視聴者は第2話冒頭を「この人は誰？ チャンネルを間違えたのかな？」などと思いながら見ることになります。そして、しばらく（我慢して？）見続けていると、第1話の物語とつながってくるのがわかるわけです。第3話冒頭の桜井ユキ・鎌田恵怜奈（子役）も、これとまったく同じ手法であり、第3話で初めて登場する人物です。

このように、視聴者に疑問を持たせるシーンでスタートするという手法は第2話以降も継続しています。ちなみに、今夜（5/10）放送される第4話では葉山奨之（はやましょうの）が初登場しますが、だとするならば、第4話は彼のシーンからスタートするのではないかと予想しています。

西谷弘さんは、ドラマ界を代表する演出家の1人であり、背景に映る映像や美術に対するこだわりの強さ、センスの良さが持ち味だったりするのですが、今回の講義ではこのくらいで勘弁してください。m()m 第3話では、大理石のテーブルに稲森いずみが映っているカットがありましたが、細かく見ていくと、映像に対するこだわりの強さがよくわかると思います。

その他の今期のドラマから 一口コメント

『正義のセ』 ヒロインが勤める横浜地方検察庁。建物の外観も内装も、妙にレトロですが、鉄筋のビルだと冷たい印象が強くなるので、あえてレトロな感じにしたのだと思われます。昨夜見た第5話では、内装を見てもらいたいからなのか、検察庁内では広角レンズが多用されている印象。

『執事 西園寺の名推理』 主人公の上川隆也は、常に背筋を伸ばしていてロボットのような話し方をするキャラ。カメラワークなども、そうした点を活かすような撮り方をしているようです。

『宮本から君へ』 カメラワークにしても照明・効果音にしても、作為的な要素を極力排除して、生のドキュメンタリーを見ているような質感を目指しているようです。

『孤独のグルメ Season7』 原作者のバンドが演奏しているBGMの完成度が高くて、ドラマ内での使われ方も、いくつかのパターンがあるので、ちゃんと研究すると面白いと思います

『デージー・ラック』 演出は共同テレビのベテランの木下高男ですが、コミカルなお芝居の部分など、ちょっと古臭くてあか抜けない印象。ただ、キャスティングはかなり豪華。

『いつまでも白い羽根』 昔の昼の帯ドラマみたいな作風。青春ドラマ風からミステリー風までエピソードの幅が広いので、新川優愛が好きなら面白い。演出は地味ですが出来が悪いわけではない。

『あなたには帰る家がある』『家政夫のミタゾノ2』『崖っぶちホテル！』 どれも、あんまりちゃんと見ていません。すみません。

自己紹介 川口瑞夫(かわぐちみずお)

1964年生まれ。編集者／ライター。

稲増先生との編著に『歌謡曲完全攻略ガイド』『洋楽 in ジャパン』(学陽書房) 著書に『おとなの楽習・音楽のおさらい』(自由国民社)『ジャニドラの嵐』(共著・宝島社) 別冊宝島『音楽誌が書かないJポップ批評』シリーズにレギュラーライターとして寄稿。

今日の講義に関連して、感想・質問・相談があれば、batao@104.net にメールをください。

ドラマ演出論のサイト『木曜のD談・演出倶楽部』(休業中)

(<http://park14.wakwak.com/~d-dan/index.html>)